

栗野・徒然日記

参帖の四・秋

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2023.9.1 今日防災の日



100年前の絵が、未来を教えてくれる。

この絵は、100年前の関東大震災を描いたポスター画です。
被災者の二柱五輪田舎の、多くの取材を行い、震災発生時の
避難場所となった巨野郡巨野のの様子を写し出しました。
震災を生き延びたお母さん、身内の人、助け合った人や大を運んだ人など、
様々な人々で賑わっている様子が伝わってきます。
大震災を乗り越えてきたお母さんや、お父さんやおじいさんやおばあさん、
100年前の出来事は、未来の出来事について教えてくれます。

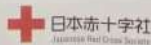
出典：巨野

日本赤十字社は、関東大震災の復興に力を

つぎました。東海に被災者支援を行っています。

温故備震

関東大震災における赤十字の活動は、
特設サイトでご覧いただけます。



阪神・淡路大震災に由来する「[はるか](#)のひまわり」の種が実ったとの報せが、地域の人から届きました。

今日は防災の日。過去をさかのぼると、おおむね120年周期で、地域を大地震が襲っています。濃尾地震を経験した私の曾祖母は、わずかな揺れにも身震いしたものです。

東京生まれの私の父は(浜町だったと思いますが)、大正9年生まれ。9月1日、関東大震災が発生したその時、父は、庭で煮炊きをしていた姉に抱きかかえられ、おんぶされ、逃げ惑う人波の中、「早く行け行け」と姉の背中越しに前を走る人を押した記憶について、生前語っていました。借家経営をしていた一家は、全てを失い、東海地方に引っ越してきました。それから今年で100年となります。

震災を体験した人の話を聴く機会は少なくありませんが、実体験しないとなかなか身に付かないかもしれません。そんな中で、2点、記憶に残っていることがあります。

1つは、枕元にサンダルを常備すること。飛び散ったガラス片で足を怪我すると、その後の活動に大きく支障が出るからです。

2つ目は、揺れが収まってから、町内を「皆さん、大丈夫ですかあー」と大声で見回ること。この二つの教えは、阪神・淡路大震災の体験者の話ですが、自分の身をどう守るか、どう備えるかと言う「自助」の視点と、みんなで助け合う「共助」の視点が語られていると思います。生死の境目は、まさに自助と共助に委ねられています。東日本大震災後の釜石市を訪れたことがありますが、わずかな油断が、被害を拡大させたことは残念ながら否定できません。

関東大震災によって、多くの尊い命が失われました。私が生を受けたことを考えると、複雑な気分になります。人生を左右する天災。もとより過去の災害を風化させ、人災にすることはあってはなりません。この機会に今一度、私たちに何ができるのか、考え、備えたいものです。【トップ写真は、9月1日付けの朝刊の新聞広告】



▲小型のギボウシが涼し気に庭の片隅に…さわやかな朝を迎えました。



▲今年も記録的と言われる夏場に、息も絶え絶えとなった灼け付いたホトトギスの花が、早くも咲き始めました。

2023.9.19 秋・・・?



クズの花に出逢いました。葉ばかり茂り、はびこる印象が強いのですが、今年はほんの一面にのみ、数えきれないほどの花が咲いています。こんなことは初めてです。ご存じのとおりクズは、秋の七草の一つです。

この夏はこれまでにない記録的な猛暑と毎日報じられました。でも本当にそうだったのでしょうか?確かに夏バテ気味ではありますが、草花の様子を見ると必ずしもそうでもないのでは?子どもどものころ、夏休みも終わりに近づくと、タマスダレの白い花が一斉に咲いていたのか、何やら物悲しく感じられたものです。庭に咲き始めたのは9月も半ばで、確かに半世紀も前と比べると3週間遅れ。ところが、令和元年は、9月28日に満開に。暑さが原因だとすれば、5年前の方が暑かったのでは・・・?

明日は彼岸の入りですが、暦のとおりヒガンバナが咲き始めました。ここ数年は、1週間ほど遅く咲く年が何度かありました。ただ、猛暑の年に開花が早まる傾向があるとの説もあります(暑さが繰り返すなど、一定の条件で左右されるみたいです)。開花期が遅れたからと言って、あるいは早まったからと言って、一律に猛暑のためと言えないのかも知れませんが、桜の開花が気温に影響されるのをつい思い描いてしまいます。

いずれにしても、秋の気配が花との出会いに感じられる今日この頃ではあります。



▲満開のタマスダレ。令和元年の開花は遅く来月下旬でした。



▲ヨウシュヤマゴボウにセンニンソウが巻き付いて、白い花を咲かせていました。



▲ノブドウの実も色づき始めました。スズメガの幼虫の食草のようです。



◀道端にドングリがもう…。



◀クズの花がこんなに花を咲かせています。

2023.9.20 洞戸観光



東京から来客があり、沢が見たい、との要望に応じ、早朝から関市洞戸を案内することに。とりあえず、高賀溪谷を目指すこととしました。粟野を通る256号を走り、道の駅「ラスティン洞戸」に立ち寄ります。県内1の生産量と言われる特産のキウイフルーツを使ったシャーベットやワインなどが販売されています。その手前に、「ふれあいバザール」の店があるのですが、ここは洞戸ではなく、まだ山県市の船越地区。ミョウガ大盛200円とピーマン150円を購入。石臼の手打ちそば屋さんは、11時からの開店のため、残念ながら食べられませんでした。40分ほどで高賀神社手前の高賀溪谷に到着。以前は、溪谷内に立ち入ることができたのですが、バーベキュー禁止の札がぶら下がったロープが張られ、橋の上から写真を撮りました。しばらく下流に走れば、河原に降りることは可能です(景観は中流域のそれ)。水はとても冷たいです。そこから、モネの池に回ることにしました。256号に戻り、すぐ近くです。土曜日ということもあり、関西方面のナンバーも多く、駐車場に入ろうとする車で混雑しています。幸い待つこともなく駐車することができました。スイレンの花は盛りを過ぎていました。粟野を出発して、2時間半ほどの駆け足で回りましたが、食事時間をとれば、3時間コースですね。自然を満喫できるエリアでした。

ちなみに、若干の苦言が…柳ヶ瀬から市内バスに乗って粟野口で降りる際、全国的に相互利

用が可能な交通系 IC カード suika が使えなかったこと(大垣市内では使えるとのこと)、追い打ちをかけるように、両替機は 1000 円札のみが可能で、10 円玉は出てこず、80 円の預かり証を、次回使うように渡されたとのこと。うそでしょ!!それは知らなかった。さらに、下岩崎を過ぎてから、一気に料金が跳ね上がったことに憤慨していました。いずれも、怒り心頭になるのも納得のいく話。市民だけでなく、岐阜市を訪れる人にも優しい町であることが大切であると、改めて教えられた次第。

そこで提案を一つ。観光不便度チェックツアーを企画したら、市外からの参加者が誘引できる上、地元では気付かない不具合も提起されて、一石二鳥なのでは?

ところで、モネの池へは、三田洞か岐北病院で岐阜板取線のバスに乗り、ほらどキウイ村で板取ふれあいバス(ぐるっとバスより小型です)に乗り継ぎ、1 時間余で到着できることを初めて知りました。板取ふれあいバス、ご存知でしたか?



▲高賀溪谷。昔は岸边まで下りていけたのですが、立ち入り禁止に。バーベキュー禁止がその理由か。



▲行く途中、高賀神水には、水をポリタンクに詰め、多くの方が訪れていました。



◀道の駅「ラステイン洞戸」に特産品のキウイフルーツが実っていました。



◀高賀神水の水汲み場の脇で、大きな冬瓜と長いへびウリが百円で売られていました。

2023.10.2 一気に秋の気配…



コミュニティバス“ぐるっと”が、黄金の実りの中を走ってきました。10月に入ったら途端に、朝晩は涼しさと言うより、日差しが恋しい気分。9月は観測史上、考えられない暑さとの气象台の発表ですが、この気温の落差はこたえますね。秋本番も思いがけず早い時期になるかもしれませんね。こうなると、何故か、夏が恋しいのは例年通りのお約束です。ちなみに、昨日、鴨が飛来していました。数年前も、10月1日に貯水池に初飛来しました。動物の季節に応じた動きは、植物より暦に忠実な気がします。



▲鳥羽川堤でスルポが花開いていました。10年ほど前には、少なかったのですが、随分増えました。根もとの葉は、スルポではなく、後ろに見え隠れしている細い葉がスルポです。



▲ハーブの一種のアップルミントが群落状態。その中から、後方に花を咲かせているのは、スルポ。

2023.10.3 毒食う虫



写真の芋虫は、ハマオモトヨトウという蛾の幼虫。アマリリスオオハマオモト、キツネノカミソリ、スイセン、タマスダレ、ヒガンバナなどヒガンバナ科を食草とするらしい。4月から秋にかけて、数回、発生を繰り返すそうだけれど、少なくとも今年は、庭で初めて見かけました。写真の幼虫は、タマスダレの葉を食べていました(10匹以上も)。一方、このタマスダレ、葉から根まですべてに毒が含まれています。ニラの葉やノビルの球根と間違えやすいので、鳥羽川堤に紛れ込んでいる場合、草摘みをする人は注意が必要なのですが、この虫はお構いなし。

毒草を食べる昆虫はキオビエダシヤクなどほかにも存在するようですが、解毒又は体内に毒を蓄えられるような仕組みがあるのではないかとされます。自然界で生き延びるため、虫も植物も必死に生きています。

2023.10.12 「岐阜へ行く」～その1～



駐車場のない岐阜商工会議所で開かれる講演会に出掛ける。“ぐるっとバス”粟野台バス停から、市内均一料金の下岩崎の岐阜バス停へ。粟野は市内じゃないのかと思えるほど(バス停名称も「粟野(岐阜市)」が正式名称)で、下岩崎を過ぎると、わずか2キロほどで倍以上の料金にはね上がる(JR岐阜駅空から下岩崎まで230円、一駅の上岩崎で一気に400円に上がり、粟野口450円、粟野500円)。運賃100円のぐるっとバスはその名の通り地域をめぐるので、30分ほどかかるけれど、中心市街地に行くには路線バスの粟野バス停で乗るより170円安い。“ぐるっとバス”様様。急ぐ旅でもなし、最後部の座席で車窓の景色と乗り降りする人を眺めながら、下岩崎に到着(コミバスのHP参照)。そこから路線バスに乗り換えて約15分、柳ヶ瀬で下車。講演会まで時間があるので、遅めの昼食(カツカレー)をいただく。昔ながらの支那そば屋さん(支那そば屋さんは店そのものが消えていた。もともこの日の木曜日は定休日(丸物百貨店の定休日だった名残り)なので、最初から覚悟していたけれど、もう二度と味わえないあの味、子供の頃から親しんできた店の廃業は寂しい。食後、柳ヶ瀬歩き(柳プラ)しながら、講演会場へ。昔は、映画や買い物を楽しみに郊外から柳ヶ瀬に出かけることを「岐阜へ行く」と言ったそうだ。昔も今も、高齢者が中心部を訪れるのには金も時間もかかる。わずか7Kmなのに遠いのだ。行かなければならない必然性も今や見当たらない。その昔、高富と岐阜駅間を走っていた電車があれば、中心部の求心性もあるかもしれないし、何より、都市としての一体感が得られるに違いない(続く)。

2023.10.12 「岐阜へ行く」～その2～



ぐるっとバスと路線バスを乗り継いで柳ヶ瀬の近くにある、駐車場がほぼない岐阜商工会議所で開催される講演会にやってきた。主催は、食育のグループ「燦々の会」と先月公民館講座の商工会議所の科学・エネルギー部会。

先月、公民館講座の群読で一緒させていただいた燦々の会の主宰者のN先生から、その際に案内チラシをいただき、ネットで10月3日に受講を申し込んだその日の午後、N先生が急逝されたとの連絡。群読では先生はママ役、私が子供役の掛け合いを楽しんだばかりなのに。

翌日、お別れに伺ったお顔は眠るかのようでした。

講演会は、鈴木宣弘・東京大大学院教授による「深刻化する食料・農業危機」。我が国が直面する食料危機の実態を痛感させると共に、未曾有の危機を招いた張本人は誰か、ミステリー番組を彷彿とさせる政府機関の舞台裏など、-本人の出演されるテレビや著作でも伝わらない、肌で感じられ、記憶に残る講演内容でした。兵糧攻めされれば、ミサイルなくとも国民が飢餓で全滅する我が国の安全保障のあり方は、身近な粟野の農地の消滅と宅地開発にも直結。また、輸入に頼る食料の質と安全が世界最悪レベルにあることが改めて浮き彫りに。こんな我が国の現状を招いた責任は我々にもあるに違いない。食料の安全保障に控えめなマスコミ報道のあり方もさることながら、国任せにしないで、私たちの目が届きやすい身近な地方自治体における取り組みを応援することも大切なのでは。それにしても、半世紀前まで盛んだった消費者運動のうねりは、どこへ行ったのだろうか？

昼食でいただいたカツカレーの素材は、アメリカやオーストラリアやEUでは食料用に禁止されているはずの成長促進剤が、日本向けには投与され続けている豚肉かも？

2023.10.13 「岐阜へ行く」～その3～



衝撃が走った。来年7月末、岐阜高島屋の廃業が決まるとの報が、夜半、ネットに流れる。丸物百貨店を引き継いだ岐阜近鉄百貨店のシャッターが閉じるのを最前列で見たのは平成11年のこと。柳ヶ瀬の灯がまた消える。高島屋が完成した昭和53年、建物の完了検査を終えたばかりの行政担当者が素晴らしい建築物だ、と頬を紅潮させていた。1階が公開空地「バラの広場」として整備され、消費生活展はじめ各種イベントも開催された

(再開発事業の要件だった公開空地は、その後の規制緩和で売場に改修)。市内初の第一種市街地再開発事業として、また柳ヶ瀬の新たな象徴として脚光を浴びた岐阜高島屋だが、オープンした後も長い間、事業に再開発反対の権利者の店が隣接地に1件取り残されていた。通称、高島屋南地区は、平成2年の1月だったか、2月だったか、再開発の研究会が立ち上がったが、なかなか軌道に乗らなかった。一因は、再開発への不信感もあった。建物の工事の囲いが取り外されたところが、意に反して壁が立ちはだかっていた。高島屋南地区は裏通りへと変貌していた。難産の末、再開発ビル「柳ヶ瀬グラスル35」が今年完成し、心居住が進むこれからという時期の高島屋の閉店の報だ。昨日、商工会議所の講演会に出向いた折、お土産にと崎陽軒のレトルト焼売を求めて高島屋の地下に立ち寄った。食品売場はそこそこの人が集まっていたけれど、他の売り場は相変わらず閑散としていた。ネット通販が盛んな今日、百貨店の苦境は想像に難くない。集客の核が百貨店頼みという時代が過ぎた今、商店街のアイデアとエネルギーを結集した新しい「ヤナナ」(覚えてますか、段ボかつてはールをかぶっをかぶった全国的に有名なゆるキャラ)の誕生を願うばかり。一方で、かつて、市街からの誘客に力を発揮した路面電車がすんなり廃止された中心市街地の商店街だが、今また、その自助努力だけでは活性化は難しい。

交通機関の利便性向上とともに、講演会も良いけれど、「岐阜へ行く」その必然性の創出に知恵を絞りたい。

2023.10.28 似た者同士



秋晴れのはずが、時折、雨降る日に。とは言え、時雨という感じではありません。

秋の訪れを感じさせる自然に目をやると、小さな生き物の健気な姿に出会います。

トップの写真は、体調1cmに満たないヨモギハムシ。その名のとおり、食草はヨモギですが、アワコガネギクに数匹が集まっていました。ハムシの仲間も種類が見分けがつきにくいので、もしかすると違う種類なのかも？

水滴が朝日に輝く巣の真ん中に微動だにせずに鎮座するジョロウグモ。コガネグモとよく似ていますが、秋によく太っている種類はこちららしい。ちなみに、関東地方では、純絶滅危惧種に指定する都県もあるようです。

モンキチョウとひとくくりで呼んでいるチョウも、多くはキタキチョウらしい。早朝、しずくを避けて葉の裏に羽をしっかりと閉じているのは、キタキチョウ。モンキチョウは、文様が比較的目立って見られるのに対し、黒いゴマ斑しかありません。そのキタキチョウも、夏と冬では、斑に違いがあるようです。

種類の違いに思いを寄せられるのは、もの思う秋ならではのこと？



▲住宅街の近くでよくみられるキタキチョウが、早朝、翅を閉じていました。



▲コガネグモと間違えやすいジョロウグモ。雨上がりの水滴が輝きます。



▲霧も晴れて、雨も上がるかと思われましたが、この後、眉山は雲で覆われ、パラつきました。【6時46分】

2023.10.29 深まりゆく秋



クサギの熟した実が、山裾に輝いています。

街路樹のハナミズキも、紅葉し、赤い実をつけています。その先の枝には、もう来年のつぼみも見られます。

暑い暑いと言っていたのは、まだつい最近のような気がしますが、一気に秋は深まりつつあるようです。



▲街路樹のハナミズキは、もう間もなく葉を落とすことでしょう。

2023.10.30 長良川の秋散歩



天高し、長良川の藍川橋から津保川へさかのぼってみました。岸辺に群れていた小魚が、人影に驚いて遠ざかり、しばらくするとまた戻ってきました。岸辺の木々の葉は、まだ青々としています。

珍しい草花を見つけました。

ツメレンゲです。長良河畔で見たのは初めてです。岐阜県では純絶滅危惧種に指定されています。

その近くにネナシカズラが木に巻き付いています。小学6年生のころ、同じく寄生植物のマメダオシを見かけましたが、ネナシカズラは初対面です。種が色づき始めていました。こうしてみると、ハロウィンの似合いそうな不気味さを備えていますね。

15年ほど前に見かけた、絶滅危惧種のフジバカマの個体はさすがに消えていました。

子供のころ、肥沃な土が堆積したの岸辺の北陰は、苔の宝庫でもありました。

護岸も進んだ今では、珍しい苔はあまり見かけなくなりました。

澄んだ空気と水、草花との出会いはささやかな喜びを与えてくれます。



▲純絶滅危惧種のツメレンゲが堤防の石垣にひっそりと生えていました。



▲ネナシカズラは、ハロウィンの時期らしい雰囲気醸し出しています。

2023.11.8 立冬の返り花



▲キツネノマゴは、暑い日が続いたせいか、まだ咲いている。

今日は立冬。とはいえ、朝晩は冷え込むものの、日中の日差しは暑いほど。道端に、ノジスミレと思われる返り花。タンポポも咲いているが、近年は返り花というより、ごく普通に開花している印象がある。

7日、都心では、27.5度。11月の気温としては100年ぶりに最高気温を更新したとか。しかし、温暖化が始まる前の1923年に27.3度というのもすごいかも知れない。

折しも、今年は、1940年以来、世界平均気温が過去最高になるとも、EUの気象情報機関が本日発表している。

ほんの小さなことでも良い、地域から、気象変動に対する何か工夫と取り組みが発信できないものか？ 緑を増やすべきなのに、農地が減少する現況は真逆。せめて、家庭や公共用地の草花や樹木を増やしたい。

地域ごとの小さな積み重ねが、日本中に広がれば、大きなエネルギーになる。

2023.11.13 はるかのひまわり



阪神・淡路大震災の被災地に芽生えた“はるかのひまわり”を育てるプロジェクトに、今年初めて参加した岩野田北まちづくり協議会。この夏、岩野田中学、岩野田児童センターをはじめ、参加希望者のご自宅で花が開きました。その後、寄せられた種を天日で干したり、選別しました(大量なので大変)。と、こぼれた種から芽が出てきました。草花によっては、冷蔵庫に入れて寒さを越さないで発芽しない種類もあるのですが、ひまわりはそうでもないらしい。もっとも、この寒さでは、育たないですね。

被災地の芽生えた近所に、ハムスターの種類を飼っている人がいて、“はるかのひまわり”は、そのこぼれ種らしい。黒い縞模様が特徴です。

ところで、人間用の食用のひまわりの種をスーパーで見つけました。これが結構イケる“はるかのひまわり”に参加したおかげで目に留まった…新しい発見でした。



▲食用のひまわりの種。結構イケる。

2013.11.14 植物細密画を虫眼鏡で見る



植物の細密画の展覧会のご案内をいが置かれていました。花だけに虫？ 会場に入り、その理由が分かりました。拡大して見つめても、違和感なくイキイキと、線も色合いも写し取られています。

見終えた後、月並みな質問をしました。1枚描くのに、3ヶ月はかかるとのこと。その成果を眼の前にして、何事にも時間をかけて向き合い、丁寧に、一つずつ進んでいくことの大切さを改めて実感しました。

ご案内いただき、ありがとうございました。



▲広い展示会場の中で、草花が輝きを放っていました。

2023.11.15 ai(人工知能)による計画立案



「aiによる自動音声でお伝えしています」・・・平成30年からNHKのニュース番組に導入された。まだ、aiと分かってしまうレベルで、気分が落ち着かない(チャンネルを即座に切り変える)。読み上げる間が一定の間隔だから、馴染めないのかも知れない。徐々に改良されていくだろうから、長い目で見てあげるとして、aiによる複数の偽造画像(安倍元首相の談話をはじめ有名人のものが多い)がネットで流されていることは看過できない。ai生成のフェイクニュースは、音声も含め簡単にできるため、一般人も巻き込まれるおそれがある(法整備が間に合っていない)。

今更ながらだけれど、技術の進展を生かすも悪用するの人も人間次第。

街並みを3Dで再現する技術は既に実用化されているようだけれど、地域の基盤整備や地域の課題、地域資源などの情報をインプットすればまちづくりの方向性を映像も交えながら提案してくれるプログラムが普及すれば、使い方次第だけれど、行政や地域にとってきっと参考にできると思う。

それはさておき、アナログで構わないから、地域の都市計画を住民自身が描く必要性に、地域は直面しているのではないか。都市内分権を進めるためのいわゆるエリアマネジメントである。住民自治を充実させる上で、欠かせない地域の役割だと思ふ。今後、市やまちづくり協議会はどう動く？【トップ写真は、区画整理事業が施行されていない郊外部における宅地化の進展と通過交通の危険な現状を示している】